

## 緑爽会会報 No. 138

2015年6月25日発行  
日本山岳会 緑爽会  
発行人 松本恒廣



デザイン・制作 関塚貞亨会員

～～《報告》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

### 2015年度緑爽会総会

開催日：2015年5月14日（木）

出席者：31名 田邊壽、芳賀孝郎（北海道支部）、山本良子、梨羽時春、松本恒廣、関塚貞亨、吉田理一（越後支部）、里見清子（山梨支部）、渡部温子、高辻謙輔（越後支部）、平野紀子（群馬支部）、鳥橋祥子、樋口公臣、大島洋子、島田稔、間瀬泉（越後支部）、富澤克禮、夏原寿一、瀬戸英隆、田井具世、川口章子、中尾千予光、小泉義彦、西谷隆亘、西谷可江、近藤雅幸、石塚嘉一、中村好至恵、荒井正人、手塚照子、小原茂延

1995年に発足した緑爽会は、この9月で20年目、一つの節目を迎える。旧・自然保護委員経験者を中心に約30名でスタートした当会は、今、60余名の仲間が出来た。

今年の総会は、5月というのに気温29度を超す暑さの中、31名の出席者を迎えて開催した。当初予定していた会議室では手狭だし、暑苦しいので急遽104号室に変更したが、ここは飲食禁止のためちょっとこたえる。会員総数63名の小所帯でも1年のけじめということで、まずは議事を進める。

- ・ 事業報告：2014年度の会員移動、会報の紹介、集会、山行報告
- ・ 会計報告：2014年度会計報告および2015年度予算案が承認された。
- ・ 2015年度事業計画案：  
当会としての支援事業、毎年恒例の自然保護全国集会 = 今年度は50周年を記念して、青梅で東京多摩支部との共催で行われる旨、実行委員長富澤会員から説明があった。  
10月 講演会 = 元・副会長で自然保護委員会の大先輩、中村純二名誉会員のお話。  
11月 1泊山行 = 長澤会員の「ロッジ山旅」
- ・ 新年度の予算案： 会報印刷費用との絡みから、“会費を値上げしたら”、との提案もあったが、今後の検討課題とする。

この後、遠路はるばる魚沼から出席して下さった吉田会員が「尾瀬ガイド協会認定ガイド体験談」をスライドと共に話された。全員にお土産に、と持参された「魚沼から行く尾瀬」のガイドマップを手に、16時近くに散会した。（次ページの写真は小泉義彦会員撮影）



吉田理一会員

・近況報告（返信ハガキから）

- 芳賀孝郎： 川口様 自然保護委員長になるとのこと、ご苦労様です。無理しないよう願います。
- 田村佐喜子（信濃支部）： ウェストン祭間近で準備や打ち合わせ会等が重なってしまいます。ごめんなさい。先日の中部ブロック交流会で、新潟の吉田様にお世話になり、行きたかったのですが残念です。6月6日の鷹取山もウ祭と重なり行けません。これも残念です。
- 五十嶋一晃： 妻介護のため欠席します。 5月28日に「絵手紙友の会全国大会」が富山国際会議場で行われ、記念フォーラムにパネリストとして出席し、「立山に憧れた棟方志功」について語ります。参加者は800名余。
- 大森久雄： 日々是好日です。
- 佐藤淳志（山形支部）： 1990年、自然保護委員会が鳥海山スキー場開発問題に取り組み、以来、イヌワシの生息、営巣地発見、人工巣柵の設置など、調査を含めて25年経過しました。イヌワシのモニタリング調査は今も毎月最低3日間を目標に、繁殖期は更に多くの日数で実施しています。既に800日以上費やしましたが、年々繁殖率の低下は著しく、生態系の頂点に立つこの猛禽もやがては動物園の鳥となるのではと心配しています。鳥海山は眩いばかりの新緑です。皆様によろしく願います。
- 近藤緑： 夫の介護と私の脚の不具合で外出もできなくなりました。皆様とお会いする機会もなく淋しい明け暮れです。緑爽会の発展と会員のご健勝を祈ります。今限りで事務局を退めさせていただきます。長いことお世話になりました。
- 関塚貞亨： 3月に90歳になりました。やっと生きています。緑爽会幹事の皆様をはじめ、会員の皆様が協力して会を盛り上げていただけて有難いことです。今は亡き国見さんや早川さん、松丸さん、村山さん、創立者の渡辺正臣さんも、会の現状を喜んで見守っていると思います。
- 川嶋新太郎： 総会当日、私共アルパインフォトクラブもPM6：00より総会開催で事前準備などありますので欠席致します。
- 高辻謙輔（越後支部）： 新しい名簿を作成される時、自宅ファックス欄に記載をお願い申し上げます。（電話番号に同じです。）
- 中澤喜久郎： 病後の養生に専念中です。

- 山川陽一： 他用とバッティングです。深謝。
- 尾野益大（四国支部）： 申し訳ありませんが、都合があり総会を欠席します。日ごろお世話になっています。総会が盛況でありますよう祈念しています。先日の小島烏水祭は大変盛り上がりしました。今後ともご支援お願いします。
- 樋口みな子（北海道支部）： いつも楽しく会報を読んでいます。私も自分の通信を発行していますので、その苦勞はよくわかります。
- 深田森太郎： 相変わらず週4回の講義を中心に慌ただしく過ごしております。14日（木）は授業が16時までであるので、残念ですが欠席とさせていただきます。6/6の鷹取山は参加させて頂く予定であります。
- 三枝海枝： 去る3月に夫が亡くなり、後に続く様々な手続きなどで落ち着く日々もなく返信が遅れました。今年の山行も出来る限り参加するようには思っていますが……。皆様によろしくお伝え下さい。
- 荒井正人： 欠席ではありませんが、この場をお借りして。6～10月の5か月間、休会状態となり申し訳ありません。（尾瀬・原の小屋管理のため）会報はJACのHPにUPされるなら郵送はこの間不要です。会費はちゃんと払います。
- 藤下美穂子： 初めての総会ですが、勤務のため申し訳ありません。今年は、少しは皆様とご一緒出来たらいいなと思っています。どうぞよろしく願いいたします。

## 6月山行 鷹取山

西谷隆亘

平成27（2015）年6月6日（土）晴れたり曇ったり

メンバー：松本恒廣、渡部温子、富澤克禮、夏原寿一、石塚嘉一、西谷可江、西谷隆亘

梅雨の前線が関東地方に懸かりそうであったが、夜来の風雨も上がり、清々しい朝を迎えた。JR中央線高尾駅から普通列車甲府行に乗車、藤野駅下車。藤野15名山の一つである鷹取山を目指して、9時50分発の神奈川交通のバスで鷹取山登山口のある上沢井停留所まで10数分。橋を渡った処で、各自準備体操をして、10時5分出発。緩やかな上り道を進むと、道の脇には大柄な数輪のホタルブクロが一行を迎えてくれた。11時過ぎ鷹取山（472.4m）頂上着。永禄・天正年間（1558～1591年）甲州武田氏支配の時、武田氏が相州北条氏に備えて築いた烽火台（のろしだい）の一つである“鷹取山烽火台跡”がある。脇の鐘撞堂（かねつきどう）跡に“ここに残る鐘”が吊してあり、鐘を撞くと、余韻のある、いい音色が響いた。少し早いがここで昼食。若い女性5人のパーティが来る。今回これ以外は山中で人には出会わなかった。“ここに残る鐘”と頂上の標識を中にして、記念写真を撮り、正午近くに出発。

下山路は、下の集落から尾根に峠で横合流する登路に迷い込まないように注意しながら、忠実に尾根筋を辿り、藤野神社を目指して下る。長い緩やかな尾根路は小さいながら、急なアップダウンが数多あり、緊張する場面もいくつかあった。花森山（364m）まで約30分、更に30分で小淵山（376.8m）に至る。小淵峠（350m）を過ぎ、少し上りになり、岩戸山（377m）直下の尾根で暫し休憩をとる。2時頃岩戸山を通過し、2時半頃藤野神社のお社に着いた。参拝の



ための神社正面の急な石段を避けて、安全のため回り道で無事石段直下にする。

途中の登山路は神奈川県の水源地の森林の中にあり、吹き抜ける風が心地よい。路の両脇には花の終わったヤマツツジ、ウツギ。今は盛りのホタルブクロに見送られて下山。雨に降られず、適度の日射の下、ルートファインディング、急坂の登り降りなど意外に変化に富んだ尾根で、皆さん満足した、楽しい山行であった。

町中に入り、3時前に中央高速の下を潜るトンネルを抜けると、藤野駅まで5分。藤野駅で一応解散するも、全員立川行き普通列車に乗車し、高尾駅で下車。駅を出た処の店で反省会。石塚会員から深田久弥：「百名山」の英訳をしたイギリス人の紹介があり、楽しい一時を過ごした後、それぞれ家路に就いた。

末尾になりましたが、この山行を企画し、資料を準備して下さった夏原寿一会員に心より感謝申し上げます。(文責：西谷隆亙)



鷹取山頂上で：左から石塚、西谷(隆)、富澤、西谷(可)、渡部、松本、夏原

\*山行に参加されなかった島田稔会員が、事前にご提供下さったガイドブックのコピーを当日参加者に配付しました。このガイドブックには、「鷹取山は小さい山ながら道迷いしやすいので、それを避けるために…」との詳細な記述があつて、とても参考になりました。(係・夏原記)

～～《寄稿/投稿》～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

お茶の水時代の人④ 加賀正太郎のこと 南川 金一

加賀正太郎の山岳会への思い入れ

『日本山岳会百年史』のグラビアページに、「日本山岳会図書室再建資金寄附者芳名録」の写真を載せ、その内容の一部を本文中に書いた。寄付金もさることながら、書棚（扉造作一切）、桜苗木、畳八畳（手間共）、瓦斯設備一式及び瓦斯ストーブ、謄写版一式などの現物寄付は時代を反映するとともに、会員の喜びと熱い思いが伝わってくる。加賀正太郎から水彩画と油絵の寄付があつた。豪邸に住んだ加賀正太郎から見れば、山岳会の会室など、物置小屋のようなものであつたであろうが、山岳会の戦後の再建を心から喜んだ。

加賀正太郎の美意識の高さ、そのためには金にいと目を付けないこと、そして山岳会への思い入れは『蘭花譜』に象徴される。会報177号（1955年1月）2面の末尾に「寄贈図書」として、「昨秋物故された名誉会員加賀氏未亡人より、故人が心血を注がれた洋蘭の画譜の寄贈を受けた」という短い記事が載っている。それは『蘭花譜』のことである。『蘭花譜』については、その後、会報等に詳しく紹介されることはなかったので、会の中ではあまり知られて来なかつた。加賀正太郎は洋蘭の美しさに惹かれ、大山崎山荘に温室を造り、自ら蘭の栽培に熱中した。新宿御苑の園丁を招いて一角に住ませたほどであつた。その美しさを表現して後世に残す方法として、浮世絵の

技法による木版画に着目した。戦前・戦中という時代とあってはカラー写真では表現できなかった。絵師・彫師・刷師とも目にかなった第一級の職人を集め、作品によっては百二十度刷りという凝りようだった。木版画84点、中村清太郎の筆になる油彩の印刷9点、岡本東洋による写真の印刷など11点、計104点を一セットとした『蘭花譜』を刊行、100セットを世界の植物園、大学、研究者に配った。戦後間もなくの頃である。山岳会に寄贈されたものの箱には、初刷りの第一輯を日本山岳会に贈る、との遺言が添付されていた。死の近いことを予感して、手元にあった記念の第一輯は山岳会に贈りたい、と考えたのであろう。66歳という早い死であった。『蘭花譜』がどれほどの価値を持つものか推し量るべくもないが、試みにインターネット情報を調べてみると、104点をバラで集めたセットが350万円と鑑定されていた。

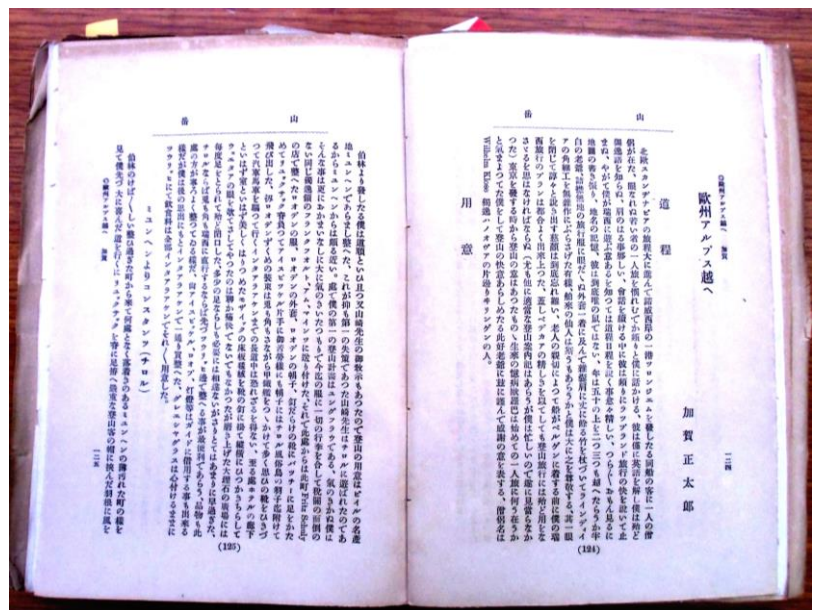
## 在学中に訪欧、アルプスに登る

加賀正太郎は1881（明治21）年大阪で生まれた。加賀家は江戸時代からの両替商で、明治期には両替商と株式仲買業で業績を上げたが、1900（明治33）年、正太郎の父親が死去、後継いだ叔父も間もなく死去したため、正太郎の母親は一時店を閉め、正太郎が成人するのを待つて再開することにして、その資金として、夫の遺産の一部である100万円で国債を買い、日銀大阪支店に預けた。現在の価値で百数十億円だという。正太郎は1911（明治44）年、東京高等商業（現・一橋大学）を卒業すると大阪に帰って家業を再開、たちまち大阪での高額納税者になった。在学中の明治43年、日英博覧会見学のためシベリア鉄道で渡欧、ロンドンへの途中でアルプスを訪れユングフラウに登った。日本人初のアルプス登頂であり、その紀行文は「欧州アルプス越へ」として『山岳』第6年第1号に発表された。後にユングフラウに登った辻村伊助は「我がなつかしい加賀君の足跡を踏んで…」と書き、加賀の登山が大いなる刺激となった。ロンドンで訪れたキュー植物園で見た洋蘭の美しさの虜になって洋蘭栽培にのめり込み、『蘭花譜』となった。

東京府立三中で同級だった中村清太郎とは生涯の山友達で、東京高商では同学年に三枝守博（威之介）、中村清太郎がいた。在学中の1908（明治41）年、中村とともに日本山岳会に入会、1950（昭和25）年三枝、中村とともに名誉会員に推挙された。

自らの設計になる豪邸・大山崎山荘は、現在はアサヒビール大山崎山荘美術館になっている。

お茶の水時代は、戦後の会の再建へのエネルギーがヒマラヤへと向かい、マナスル登頂という、山岳会が最も輝いた時代であったが、その活気の陰には加賀正太郎の好意によるニッカウキスキーがあった。





## 雨男のひとつと

近藤雅幸

このところ、どうやら雨男になってしまったらしい。4月の緑爽会山行もそうだったが、山行を計画するとその日は必ず雨が降ってしまうのである。雨の山も風情があつていいとは思うが、やはり山はカラッと晴れた空のもと、山座同定をしながら歩くほうが楽しいに決まっている。雨乞いの山は全国いたるところにあるが、どこかに晴乞いの山なんていうものはないだろうか？ そんなことを考えながら地図を眺めている今日この頃である。

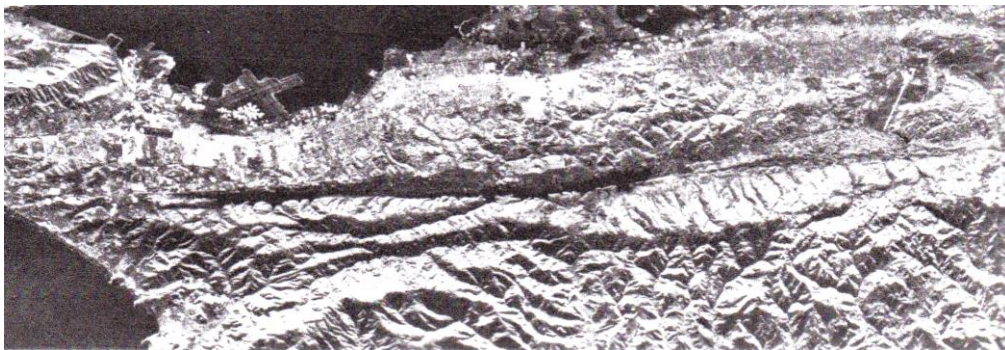
## 衛星画像から

夏原 寿一

所用で松本に行った折に足をのばして木崎湖を訪れた。木崎湖は青木湖・中綱湖と共に南北に並ぶ仁科3湖の一番南の湖だ。木崎湖へ行くには大糸線の信濃木崎湖駅で下車するのが一般的だが、そのときは1つ先の稲尾駅で降りた。ここから田圃の畦道を西へ5分ほど歩くと湖畔に出る。湖畔には丸太のベンチがあるだけで、特に何ということもない所だ。

ベンチに腰をおろして田圃で働く人々の姿を眺める、のどかな空気がただよう。山を眺めたかったら、駅から東に少し歩いて振り返ればよい。黒沢峠へと続く稜線の上に爺ヶ岳や鹿島槍が顔をのぞかせている。残雪のころ、その眺めはことのほか美しい。

さて、この地域の衛星画像を見ると、フォッサマグナの西縁の断層にできた仁科3湖がきれいに並んでいる。30数年前のことだが、地球物理の本を開いていたら複数の断層からなるサン・アンドレアス断層群の衛星画像があつた(写真)。そこは、サンフランシスコやロスアンゼルスに大きな地震を引き起こしてきた地震の巣だ。地図を見ると細長い断層湖がいくつかあつて、仁科3湖のように並んでいる。



サン・アンドレアス断層群。左上上方のX型がサンフランシスコ国際空港

それから数年後、サンフランシスコへの出張があつたので、ちょうどいい機会と思い、レンタカーを借りて断層を見に行つた。空港から南西に見えるなだらかな丘に向かって住宅地を抜けていく、ほんの数キロのドライブだ。丘に上がると期待通りに細長い湖、サン・アンドレアス湖があつた。湖のほとりには散歩やサイクリングを楽しむ人たちがいる。ここに住む人々は断層のすぐ脇で暮らしているわけで何か不思議なようだが、我々だって断層に囲まれて暮らしているのだ。何の不思議もない。そんな風景を眺めながら、湖を見下ろす草原に腰を下ろして暫しのんびりしてきた。



## 編集後記

◎ 1995年(平成7)9月に発足した当会は、20周年を迎える。これ迄の会報は、2002年(平成14)9月に創刊されて以来、主に近藤緑さんが担当されてきたがこの度、引退されることになった。

後を引き継ぐ事務局としては考慮の末、新たなタイプで続けてみることにした。従来のB4版縦組みからA4版横組に、これに伴い会報のタイトルを新たに関塚さんに制作して頂いた。作りやすく、読みやすく、をモットーにしたつもりである。ページの組み立ても山行報告を含めた例会報告、例会予定、特集記事、編集後記とある程度定め、発行も6月より隔月(6,8,10,12,2,4月)の25日とした。

また、事務局も近藤緑さん初め川口章子さん、西谷可江さんが退任されますが、新たに荒井正人さんに加わっていただき、松本恒廣、渡部温子、夏原寿一の4人体制で運営していきます

近藤緑さんには長い間ご苦労さまでした。心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

(松本恒廣)

◎ 90歳の関塚さんから「会報を続けてくれるなんてありがたいことだから、出来ることは協力する」との有難い言葉に弾みがつきました。多くの方々からご助言を頂きました。ありがとうございました。編集を一手に引き受けてくれた夏原さんに感謝いたします。

(渡部温子)

◎ 「作りやすく、読みやすく」という方針を下記のように具体化した。

- ・読みやすく—— 章立てを《報告》、《寄稿/投稿》、《予告など》、編集後記 とし、同種の記事はまとめて掲載するようにした。これにより、目的の記事に辿り着きやすくなっている。例えば、「次の例会は何日だったかな?」というときには、《予告など》を見ていただければよい。
- ・作りやすく—— 章立ての順に、上記の見出しを記載した“会報用原稿用紙”なるシートを作った。寄せられた原稿を分類して該当する章に流し込み、必要に応じて体裁を整えれば会報が出来上がる、という仕組みである。これにより、原稿がそのまま会報の形になるので、全体の組み立てが楽にできるし、編集段階で誤字などの生じることもない。

原稿には、文字変換の際の誤りと思しきものがごく稀にある。これらは修正していきたい。一方いわゆる校閲に属する部分については原則として手を加えない。文言のひとつひとつに筆者の思いが詰まっていると考えるからである。

(夏原寿一)

- ◎ 会報につき皆様のご意見をお寄せ下さい。
- ◎ 原稿は常時募集しています。埋め草用の記事やスケッチなども歓迎です。

### 関塚さん作「タイトル」の花の名前

上段左から ナナカマド、イワヒゲ、オオギの仲間、アツモリソウ、ユキノシタ、ミヤマタンポポ  
下段左から 木苺、サクラソウの仲間、レイブソウ、カラマツソウ、ミヤマリンドウ、ワタスゲ、  
ウスユキソウ、ツルコケモモ、コマクサ